

内容に確かな臨場感が読み取れる。だから今は実際にはすてに失われてしまったものに就いても追及されている。

この中に拾い出されているものの数を都府県別に調べて見ると、東京20、京都、大阪各18、長野、愛媛各12、滋賀、鳥取、島根、兵庫各10、山梨、新潟各8、石川、神奈川各7、和歌山、徳島、熊本、大分各5、埼玉、千葉、広島、山口、福岡各4、宮城、群馬、富山、静岡、三重、奈良、岡山各3、岩手、福島、滋賀、香川、高知各2、茨城、岐阜、佐賀各1、という様になっている。地域も数も大変な広がりとな数である。また著者はこう言う即物的なものを拾い挙げただけでなく、*「歯の風俗」*、*「歯に関する俗信、迷信」*、*「歯痛と民間療法」*、*「家伝薬、漢方療法」*についても色々拾い出している。集大成と言ったら著者は遠慮してそう言うて呉れるなと言いつうだが、実際は限りなくそれに近い事は間違いないと言える。拾い出された文献も二八五にも及んでおり、勿論私等は初めて見るものが大部分であるが、この面からも充分な追及がされている事が充分くみ取れる。今後こう言う面で何か言う時は、この本を通らずには一寸恥ずかしい思いをすることになると思う。

歯痛についてはあのガレヌスも *「人を殺すことのない最大の痛みは歯痛である」*と述べているが、人類のこれに就いての対応には色々の事がなされている。

外国でもこの本の様なものもきつとあるにそういないと思うが、そういうものは外国人には目には触れにくいと思う。

終わりに贅辞に代えて歯痛が歴史を動かしたエピソードを一つ添えてみると、日本の歯科医学教育のルーツとなった高山歯科医学院を創立した高山紀齋は、米国留学中に急性歯髓炎に見舞われ、その処置が動機でその時の歯科医の Van Der burch に就いて歯科医学を志し、そこで学んで帰国して今日の東京歯科大学の前身である高山歯科医学院を創立する事になった。

今日の日本では歯科医療へのアクセスが極めて容易になったので、こんな事は起こりにくいし、著者も述べている様に「あごなし地蔵」や「おびんずるさん」の様なものも衰退してゆくと思われる。そういう中で、この本の意味の重さを改めて思い返すのである。

(榊原 悠紀田郎)

(発行元：千六八〇—一三六・鳥取県岩美郡国府町糸谷一—
一五森納 電話〇八五七—二一六五三九、平成十年五月、
B5判一九三頁、四五〇〇円)

鈴木七美著

『出産の歴史人類学』

本書は薬学を専攻し、後医学社会史に興味を覚え、「歴史人類学」的立場から出産を取り上げた著者の学位論文を本にしており、文献の引用も豊富で、多彩な考按を加えた註と相俟って、本格的な学術書の体裁をなしている。助産史をテーマとしている評者も、一読して多くの示唆を受けた。特に十九

世紀の米国における、正統医学とは系列を異にするもう一つの医療―所謂オルタナティヴを提示していたセクタリアン（非正統医療者）の出産について、新しく知る所が多大であった。本書は五章から構成されているが、その内容を次に略述する。

序章「出産の歴史人類学のために」では、総論的に出産の歴史人類学の基礎となる諸概念が紹介され、分析されている。著者は「産婆から医者へという助産者の変化を単線的にあとづける出産史ではなく」、「これまで手が着けられていない「出産観の変容を明らかにする」ことを目的とするのであるが、この際特にセクタリアン運動における出産観では、「自然」というキーワードが重要であると指摘する。そして出産の歴史人類学とは、従来の出産の文化人類学と出産の社会史をリンクする領域をめざすものだという。

第一章「伝統的産婆術の世界とその解体」では、米国で「産婆の時代」とされる植民地時代から十九世紀半ばあたり迄の出産を概観し、有名なブラード夫人の日記も紹介されている。次いで一般向けの助産書として広く読まれた『アリストテレスのマスターピース（代表作）』について、詳細な解説がなされている。この本は十七世紀英国のサーモンによる訳書といわれ、アリストテレスの名を冠した偽書とされる。著者はこれについて、二世紀ソラヌスの『婦人科論』、六世紀ムスキオの『産婆問答集』、更に十六世紀レスリンの『薔薇園』、リュッフの『人間の妊娠と出産について』、ジョーナスの英訳本『人

間の誕生』と続く助産書の系譜との関連を、その類似によって示唆している。米国では一七七〇年以降正統医師ドクターが現われ、産科医師は安全面から助産婦による助産を不適とした。そして一八四〇年以降『マスターピース』も出版をみていない。

第二章ではハーブを用いる「トムソニアニズムにおける出産」を取り上げている。南北戦争前には正規医師の行う瀉血、下剤、吐剤による治療に対する不信から、セクタリアンの治療改革運動が起った。農夫トムソンは幼少時親しんだ医師代りの産婆ベントンのハーブ療法を行うようになった。トムソンは、出産には本物の痛みが伴い、必要なのは時間だけと考え、鉗子の使用は「自然」の動きを阻害し、医師の瀉血は生命である血液を取り去るので「自然の法則」に反するとして、医師を呼ぶことに反対した。そして妊娠中から「自然」を休ませるか、或は強化する植物薬をすすめ、セルフ・ヘルプの立場から助産の担い手は夫とし、「自然」を助ける助産術を説いた。

第三章は「ハイドロパシー（水治療）における出産」である。水治療はオーストリアの農夫ブリースニッツに始まり、米国ではセクタリアン運動として発達し、ハイドロパシー医を養成する学校も設立された。トムソニアニズムが出産の際痛みが来るのは当然としたのに対し、ハイドロパシーでは出産は正常で自然な過程であって、産痛は病気のしるしとした。また前者ではハーブで女性の「自然」の力を引き出そうとするのに対し、後者では水により「第二の自然」を女性に付与し

て、健康な出産を実現させようとする違いがある。

終章「産婆世界解体プロセスにおける出産・自然・癒し」では、全篇の総括と解説がなされている。米国における出産の変化―助産婦から医師へという歴史的变化の基底には、二つのセクタリアン運動にみられる様な異なる自然観、身体観の葛藤が存在したというのが著者の主張である。

ロジャースは「女性とセクタリアン医療」という論文で、一九七〇年代初めから社会学者、歴史学者達の間で、米国の医療の中のセクタリアン医療に関心がもたれる様になったと述べているが、本書もその傾向と無関係ではなからう。一九八二年、本書にも引用されているリーヴィット、ラジェ、またドニソン氏ら海外の六名と、日本から評者ら四名とで行った「産科史」についての谷口財団シンポジウムのがが想起される。これらの女性学者は医師ではなかったが、レイ・ウーマンの助産史観にはフェミニスティックな所があるような印象を受けた。セクタリアンの自然の強調と、最近の自然分娩論とは環境が違い、同一視するのはアナクロニズムである。しかし産科医の間でも、十八世紀オジアンデルの鉗子率四〇%とボエルの自然的助産術、我国の賀川流とその反対者に代表される積極・手術主義と待期・自然主義の二代潮流があり、後まで続いている。なお最近代替医療（オルタナティブ・メディスン）学会の存在を知ったことを付記しておく。出産を思索させる好著である。

(石原 力)

〔新曜社・〒101-0051東京都千代田区神田神保町二一〇〕電話〇三―三二六四―四九七三、一九九七年十二月、四六判二八四頁、本体三八〇〇円。

杉田暉道著

『やさしい仏教医学 わが国最初のターミナル・ケア学』

五三八年、百濟聖明王からわが国に仏像と仏教の聖典が献ぜられたのが、わが国への仏教伝来の始めとされている。この時以来今日まで、仏教はわが日本民族の政治・思想・社会・経済などのすべての分野で深いかかり合いを持ってきたことは周知の事実である。著者は多くの仏典及び僧侶の著書の中から、医療についての記述を抽出し、兎角難解な仏教用語をやさしく解説しながら、仏教医学への理解を深めようと試みたものである。

本書は仏教医学とは・仏教医学の治療・仏教教団の一日の過ごし方・日本における仏教医学・仏教医学とターミナルケア・仏教医学の復権の六章から成り立っている。

「仏教医学とは」では、冒頭から(一)ブツダの侍医・ギバの脳・痔・腸捻転などの六つの治療法、(二)苦・集・滅・道の四諦の思考方法が医学治療の考え方に類似していること、

(三)インドで仏教教団に入団する場合の健康チェックの方法、(四)仏教医学とアーユルヴェダ(インドの伝統医学)の病因論の比較、(五)金光明最勝王經(三世紀頃成立、日本で奈良時代に広く読経)の中の医療の記述、(六)経典に書かれている